

G. M. ホプキンスのソネットにおける対立の統合

田 邊 久美子

The Unity of Opposites in the Sonnets of G. M. Hopkins

TANABE Kumiko

Abstract

This article discusses the theme of the unity of opposites in content and form seen in the sonnets of Gerard Manley Hopkins. It focuses on the three phases of his sonnets: the Bright Sonnets (1877), the Dark Sonnets (1885), and a sonnet written after the Dark Sonnets.

In the Bright Sonnets, "God's Grandeur" expresses praise for God. Sound patterns connect different senses. The tone of the first quatrain is luminous and expresses praise for God, but the tone changes. In the octave, the world charged with the grandeur of God and the one damaged by men show contrasts.

In "The Windhover: To Christ our Lord" the poet is inspired by the attitude of "Falcon" as "the Windhover." It also symbolizes Christ as the title shows. Hopkins' enthusiasm as a poet in the octave and his calmness to control it as a priest in the sestet are barely balanced. The bird is described as "dapple-dawn-drawn Falcon." Three words are connected by alliteration, and "dapple" symbolizes God who unites all creatures into the whole.

Dapple is clearly expressed in "Pied Beauty" and manifests the ideal world for Hopkins. The sestet shows the beauty of dappled things, and the quatrain unites them. Though the sonnet has unity in itself, it deviates from normal sonnet form and is written as a "curtal sonnet."

Hopkins more often experiments with sonnet form in the Dark Sonnets and the sonnets afterwards. Contrary to the Bright Sonnets, the Dark Sonnets describes the world without the control of God. Darkness is a trait of the Dark Sonnets, where man's self is detached from God.

After the Dark Sonnets, Hopkins wrote a sonnet called "That Nature is a Heraclitean Fire and of the comfort of the Resurrection" (1888). In this sonnet, man's self becomes immortal to be united with Christ.

キーワード：統合、反対、ソネット、G. M. ホプキンス

Key words： Unity, opposites, sonnets, G. M. Hopkins

G. M. ホプキンスのソネットでは、異質な要素が様々なレベルで統合されている。ホプキンス自身も、詩人でカトリックの聖職者という異質な自己を自分の作品において統合することを生涯の目的としていた。本論では、彼のソネット、特に二つの対照的なソネット群、ブライト・ソネットとダーク・ソネット、そして、それ以降のソネットにおける対立の統合について、内容と形式の双方において考察する。

ブライト・ソネットは1887年に書かれたソネット群で、“God’s Grandeur,” “The Starlight Night,” “The Lantern out of Doors,” “The Sea and the Skylark,” “In the Valley of Elwy,” “The Caged Skylark,” “The Windhover,” “Pied Beauty,” “Hurrahing in Harvest” がこれに属する。ダーク・ソネットは1885年に書かれたソネット群で、“(Carrion Comfort),” “No worst, there is none. Pitched past pitch of grief,” “To seem the stranger lies my lot, my life,” “I wake and feel the fell of dark, not day,” “Patience, hard thing! the hard thing but to pray,” “My own heart let me more have pity on,” “Spelt from Sibyl’s Leaves,” “Thou art indeed just, Lord” がこれに属する。そして、ダーク・ソネット以降では、ホプキンスが死去する前年である1888年に書かれた “That Nature is a Heraclitean Fire and of the comfort of the Resurrection” に、対立の統合が良く表れている。

1. ブライト・ソネット

まず、ブライト・ソネットに属する作品について考察し、言葉の技巧について見ていきたい。

God’s Grandeur

THE world is charged with the grandeur of God.
It will frame out, like shining from shook foil;
It gathers to a greatness, like the ooze of oil
Crushed. Why do men then now reckon his rod?
Generation have trod, have trod, have trod;
And all is seared with trade; bleared, smeared with toil;
And wears man’s smudge and shares man’s smell: the soil
Is bare now, nor can foot feel, being shod.

And, for all this, nature is never spent;
There lives the dearest freshness deep down things;
And though the last lights off the black West went
Oh, morning, at the brown brink eastward, springs —
Because the Holy Ghost over the bent
World broods with warm breast and with ah! bright wings.

このソネットでは、語の選択により対立の調和が示されている。7行目では、ウェールズ詩の技巧“cynghanedd sain”が用いられ、頭韻と中間韻が組み合わせられている。“sm”で始まる頭韻は“smudge”と“smell”という異なる意味を結びつける。前者は視覚を、後者は嗅覚を表している。「神の威光」は、「ふるえる金箔から光を放つように突然燃え上がり、絞られた油がにじみ出るように集まって大きくなる」(1-2行目)。ここには光と油のイメージャリーが見られ、“foil”と“oil”が脚韻で結びついている。

最初の四行連は神への賛美であり、神の威光は光と油という二つのイメージャリーの統合によって示されるが、4行目からトーンが変化する。「それではなぜ人間は今では神の御力に気づけなくなったのだろうか？」ここから八行連の最後の行まで、トーンは暗くなり、詩人は産業革命後の人間の営みを批判する。八行連では、神の威光に満ちた世界と人間によって汚された世界の対比が見られる。

六行連は八行連のまとめとなっている。自然には「尊い命がみずみずしく脈打っている」。11、12行目は神の威光が決して尽きることがないことを示している。最後に、聖霊が人間の欲によって曲がった世界を覆い、人間と神の統合が見られる。

ホプキンスのソネットにおける特徴の一つは六行連における宗教的結論であり、神と人間の統合という理想が見られる。“God’s Grandeur”では、六行連に“Oh!”や“ah!”という感嘆詞が介入する¹⁾。ブライト・ソネットの六行連における感嘆詞は、神との統合を希求する詩人の心情を表しているように思われる。このような感嘆詞はホプキンスのソネットにおいて効果的に用いられ、彼の神の理解を官能的に表現しており、その表現は官能性と禁欲主義を混合したものと言えるだろう。

さらに、聖霊は“broods”や“bright wings”という語に見られるように鳥のメタファーで描写され、聖霊の「インステイブ」が鳥であることを示している²⁾。鳥のメタファーはホプキンスのソネットにおいて、“Spring,” “The Starlight Night,” “In the Valley of Elwy,” “The Sea and the Skylark,” “The Windhover,” “Pied Beauty,” “Hurrahing in Harvest,” “The Caged Skylark,” “Duns Scotus’s Oxford,” “Henry Purcell,” “The Handsome Heart,” “Peace,” “As kingfishers catch fire,” “Spelt from Sibyl’s Leaves,” “Thou art indeed just, Lord”に見られる。これらの例は詩人の鳥のイメージャリーに対する関心を示している。ダーク・ソネットにおいては、鳥の描写は、“Spelt from Sibyl’s Leaves”と“Thou art indeed just, Lord”にしか見られない。しかも、主題ではなく、補足的な描写にすぎない。

Only the *beakleaved* boughs dragonish | damask the tool-smooth bleak light;

(“Spelt from Sibyl’s Leaves” 9行目)

...*birds* built — but not I build;

(“Thou art indeed just, Lord” 12行目)

ホプキンスにとって鳥は詩人の創造性や自由な空想、そして、自然の象徴である。だから、詩人が創造性の欠如を嘆くダーク・ソネットでは鳥の描写がほとんど見られず、“Thou art indeed just, Lord”で述べているように、詩人は鳥のように創作することができないと嘆いているので

ある。ブライト・ソネッツは自然を描写しており、人間が自然やその創造主である神と調和するというホプキنزの理想を如実に表している。それに対し、ダーク・ソネッツでは、自我への固執が見られ、それゆえに詩人は自然に目を向けることができない。自然界から神のいる天へと羽ばたく鳥は、神と人間を仲介する聖霊の役目を果たす。ゆえに、ダーク・ソネッツにおいて鳥の描写が見られないということは、自己が神と切り離されていることを意味している。

前述のように、ホプキنزのソネットにおける鳥のイメージは、詩人の創造力や自由な空想を表す場合と、宗教的意味合いを持つ場合がある。“The Windhover”には、その両方が示されている。

The Windhover:

To Christ our Lord

I CAUGHT this morning morning's minion, kingdom of
daylight's dauphin, dapple-dawn-drawn Falcon, in his riding
Of the rolling level underneath him steady air, and striding
High there, how he rung upon the rein of a wimpling wing
In his ecstasy! Then off, off forth on swing,
As a skate's heel sweeps smooth on a bow-bend: the hurl and gliding
Rebuffed the big wind. My heart in hiding
Stirred for a bird, — the achieve of, the mastery of the thing!

Brute beauty and valour and act, oh, air, pride, plume, here
Buckle! AND the fire that breaks from thee then, a billion
Times told lovelier, more dangerous, O my chevalier!

No wonder of it: shéer plód makes plough downm sillion
Shine, and blue-bleak embers, ah my dear,
Fall, gall themselves, and gash gold-vemillion.

夜明けにチョウゲンボウを見つけた詩人は、その態度に靈感を受ける。鳥は大文字の“Falcon”として神格化されている。1-5行目では、「なだらかにうねる順風に乗る」チョウゲンボウが詩人の心を捉え、その動きは彼の心の動きも同時に表している。詩人は創造力や空想の象徴としてのチョウゲンボウに靈感を与えられ、自由な空想でこのソネットを書いている。詩人の歓喜が極まる様子は鳥の飛翔と一致する。「空高く舞い上がり 小刻みに波打つ翼を手綱で引き締めながら 輪を描き 恍惚として漂っている！」(4, 5行目) ウィリアム・エンブソンがチョウゲンボウとペガサスの関連について触れているが (*The Critical Heritage* 169)、ペガサスのイメージは馬を連想させる「手綱」(rein)という語に見られる。また、「波打つ翼」

(wimpling wing) は単数形であり、ミルトンが *Paradise Lost* で述べる「ペガサスの翼」(Pegasean wing) の含みがある。

Descend from heaven Urania, by that name
If rightly thou art called, whose voice divine
Following, above the Olympian hill I soar,
Above the flight of Pegasean wing. (Paradise Lost VII 1-4)

詩人は詩神の一人であるウラニアに祈りを捧げ、その声の導くままにペガサスの翼が舞う高みへと舞い上がる。同じく、“The Windhover” も一人称の語りであり、観察者としての詩人はチョウゲンボウに同化し、空想の飛翔により空高く舞い上がる。*Paradise Lost* において“Urania,” “the Olympian hill,” “Pegasean wing” という語句から詩人が詩的靈感を得ることが示される。ペガサスは詩人に靈感を与え天才の域にまで届かせる存在であり、ペガサスを想起させる“The Windhover” の鳥も、靈感や空想と関連していると考えられる。つまり、“The Windhover” は詩を書くこと自体を隠喩的に述べた自己言及的な詩ということになる。さらに、1, 2行目の“m”や“d”の頭韻は鳥の動きをリズムカルに表しており、内容と形式を一致させている。

このソネットにおいて、「日の国の皇子」と称される鳥はキリストのイメージを喚起する。「日の国」が天国だとすると、「皇子」はキリストである。このことはタイトルにも裏づけられており、チョウゲンボウとキリストはコロンにより同一であることが示される。また、4, 5行目には馬に乗った騎士のイメージが見られる。このイメージは、11行目の「おお わが騎士よ！」と言う詩人の心の叫びにおいて強調されている。「騎士」(chevalier) という語は、騎士道や十字軍を思わせる中世主義的な響きを持つ。騎士道も十字軍もキリスト教の理念と関連し、兵士のイメージは、キリストを神の国のために戦う兵士とみなすイエズス会の理念と結びつく。イエズス会の理念に忠実であったホプキンズの他のソネットでは、(The Soldier) において、さらにこのイメージが明示されている。

詩人の自由な空想とキリストを象徴する鳥は、強風に対峙する(6, 7行目)。これは詩的空想を制御する司祭としての態度を示すものでもある。ホプキンは1877年9月23日にイエズス会の司祭に序品されている。6行目のコロンは詩人と司祭という二つの自己を統合している。詩人は空をかける鳥に同化し、そのエクスタシーを同時に体験する。これは詩人が靈感を受けた時の恍惚であり、それにより彼は空想の翼を広げる。“sweeps” と “smooth” の音は、鳥の自由な飛翔を表している。

7, 8行目で観察者としての詩人の介入が見られる。「隠れている私の心」という表現は、観察者であると同時に司祭としての立場も示唆している。詩人は、「舞い上がり、なだらかに飛び、強風に対峙する」鳥の力強い飛翔に靈感を与えられる。このような表現は鳥の身体的な美を見事に表しているが、その美は「強風に対峙する」ことで生み出される。鳥は禁欲的な美と身体的な美の両方を象徴している。観察者である主体は詩人であり司祭としての自己を省みる

が、この段階では、鳥の身体的美に対する詩的情熱の方が勝っている。これは“the achieve”というホプキンズの造語に示されているが、動詞の形を名詞として使用することで動的・身体的ニュアンスが付与されている。

詩人の歓喜は六行連の最初の3行で最高潮に達する。「引き締めよ！」という表現において、詩人とキリストが鳥のイメージにおいて統合される。鳥から発する火は「何億倍も美しい」。それは鳥のインスケイプがキリスト、司祭、詩人を統合しているからだが、それが「さらに危険なものとなる」のは、詩人の狂気とも言える熱狂のせいである。

詩的情熱を象徴する鳥から発する火とは対照的に、「青白い残り火」は情熱を抑えようとする司祭としての姿勢を表している。このソネットは六行連でかろうじて調和が見られるが、鳥から発する火の方が青白い残り火より読者の印象に残るのは明らかである。

“The Windhover”は隠喩的に詩を書くプロセスを示唆しており、ホプキンズは詩のインスケイプを表すことに成功している。インスケイプの目的は対立を統合することであり、ホプキンズはソネットにおいてインスケイプを示すために、特にメタファーにおいてさまざまな技巧を駆使している。

“The Windhover”において、鳥は「斑なす一瞬に一引きつけられた隼」(dapple-dawn-drawn Falcon)と描写されている。この複合語では3つの語が“d”の頭韻とハイフンで結びつけられている。「斑」はあらゆる個を全体として統合する神を象徴し、キリストの象徴であるチョウゲンボウとの関連を示唆している。

斑は“Pied Beauty”においてより明確に示され、ホプキンズの理想の世界が描かれている。

GLORY be to God for dappled thing —
For skies of couple-colour as a brinded cow;
For rose-moles all in stipple upon trout that swim;
Fresh-firecoal chestnut-falls; finches' wings
Landscape plotted and pieced — fold, fallow, and plough;
And áll trádes, their gear and tackle and trim.

All things counter, original, spare, strange;
Whatever is fickle, freckled (who knows how?)
With swift, slow; sweet, sour; adazzle, dim;
He fathers-forth whose beauty is past change:
Praise him.

“Pied Beauty”は、最初と最後の行に示されるように、神を賛美するソネットであり、これはブライト・ソネット全般に見られる主題である。六行連では斑の美が描写され、自然界に顕現するインスケイプが技巧により示される。“couple-colour,” “rose-moles,” “Fresh-firecoal,” “chestnut-falls”といった複合語は、規則的な形で異なる要素の統合を表し、5行目の“p”の頭

韻は「区画された」(plotted)と「継ぎ合わされた」(pieced)という対立する意味を統合している。

四行連は、六行連で描写された斑のものたちを統合している。「すべてのものは対立し、個性を持ち、はみ出し、風変わりである」が、それらのものは斑の源である神により統合される。斑の概念は“freckled”という形容詞により強められ、斑の本質は「うつろいやすい」(fickle)が、それらの語は“f”の頭韻と中間韻“ckle”により統合されている。9行目で描写される対立は、音により統合される。つまり、最初の二つの対立は“s”によって、最後は“d”によって統合され、それぞれの語に強勢がある。斑はうつろいやすいが、それが不変の神の美となる時、変わらぬものとなる。ホプキンズは神に捧げるソネットにおいて、自然界の移ろいゆく美を不変のものにしようとするのである。「神を讃えよ」という最後のフレーズは、彼の司祭としての自己をよく表している。

このソネット自体は統一性を持っているが、形式においては、ホプキンズの他のほとんどのソネットから逸脱している。彼の通常のソネット形式が八行連と六行連から成り立つペトラルカン・ソネットと呼ばれるイタリア式ソネット形式であるのに対し、このソネットは六行連と四行連から成るホプキンズ独自の短縮ソネットの形を取っている。

“The Windhover”における詩的情熱を抑える司祭としての冷静さや、“Pied Beauty”における神が統合する斑の世界に見られるように、ブライト・ソネットの六行連では宗教的・倫理的結論が見られる。また、意味内容と技巧・形式の双方によってインスケイプを表そうとする試みがブライト・ソネットに示されている。

インスケイプは、詩人が個の本質を凝視するときの詩的靈感、つまり、彼の空想によって見ることのできる、別の個の姿を表し、異なる事物の統合を意味するが、ホプキンズの詩学において、神と人間という異なる性質を統合するキリストと関連する。一方、斑は明確な区別のない事物が混ざり合うことを意味するがゆえに、それぞれの個物を融合し全体としてまとめる神の御業の象徴となる。

2. ダーク・ソネット

“Pied Beauty”に見られるような定形外ソネットは、後のダーク・ソネットとそれ以降のソネットにおいてさらに実験的に試みられるようになる。例えば、八詩脚ソネットの“Spelt from Sibyl’s Leaves”や六行詩脚添行ソネットの“*That Nature is a Heraclitean Fire and of the comfort of the Resurrection*”が、ホプキンズ独自の逸脱ソネットとして挙げられる。これら二つのソネットは、“Pied Beauty”と同じく、斑のものたちの移ろいやすさを示している。

ブライト・ソネットとは対照的に、ダーク・ソネットでは神に統合されない斑の世界が描写されている。“Spelt from Sibyl’s Leaves”が、その状況を最も典型的に表している。

EARNEST, earthless, equal, attuneable, | vaulty, voluminous, ...stupendous

Evening strains to be time’s vást, | womb-of-all, home-of-all, hearse-of-all night.

Her fond yellow hornlight wound to the west, | her wild hollow hoarlight hung to the height

Waste; her earliest stars, earlstars, | stars principal, overbend us,
Fire-featuring heaven....

(1-5)

“Pied Beauty”のイメージが明るい太陽に照らされた世界であるのに対し、“Spelt from Sibyl’s Leaves”では夜になろうとする夕暮れの薄明りのイメージがある。「明暗の溶け合った」夕暮れは斑を想起させ、「頭上を覆う、広漠とした…途方もない」という形容語句は無限の空間の圧迫感を表し、夕暮れは「時の巨大な | 万物の子宮、万物の故郷、万物の棺である夜にひたすら移り変わろうとしている。」つまり、暗闇が生から死までを覆いつくすのである。ここでは斑のものたちは神に統合されるのではなく、「万物の棺」という暗いイメージを伴う夕闇に支配されている。

暗闇はダーク・ソネツツの特質であり、暗闇の中で自己は自然界における対立を統合するインスケイプから切り離される。“I wake and feel”は、この状況をよく表している。

I wake and feel the fell of dark, not day.
What hours, O what black hours we have spent
This night! What sights you, heart, saw; ways you went!
And more must, in yet longer lights delay.
With witness I speak this. But where I say
Hours I mean years, mean life.

(1-6)

暗闇は視覚と時間の感覚を麻痺させる。その感覚を失うことで、人間は自然から隔離され、自己というものに否が応でも向き合わざるを得ない。この状況下において、自己は外界の世界、インスケイプ、神の秩序から切り離されている。“Spelt from Sibyl’s Leaves”にも同じ状況が見られる。

...For earth | her being has unbound; her dapple is at end, as-
tray or aswarm, all throughther, in throngs; | self in self steepèd and páshed—...

(5-6)

“I wake and feel”の3行目で詩人は彼の心と対話するが⁵、“Spelt from Sibyl’s Leaves”でもこのような対話がなされる。

...Heart, you round me right
With: Óur évening is over us; óur night | whélms,
whélms, ánd will end us.

(7-8)

“Pied Beauty”では斑のものたちの対立は神により統合されたが⁶、“Spelt from Sibyl’s Leaves”における対立は統合されることはない。

...Lét life, wáned, ah lét life wind
 Off hér once skéined stained véined variety | upon,
 áll on twó spools; part, pen, páck
 Now her áll in twó flocks, twó folds — black, white; |
 Right, wrong; reckon but, reck but, mind
 But thése two; wáre of a wórld where bút these | two
 tell, each off the other; (10-13)

対立する意味を対照する描写は“Pied Beauty”に類似するが、結論は逆であり、神の賛美ではなく、自己の苦しみを表す造語が見られる。

...of a rack
 Where, selfwring, selfstrung, sheathe-and shelterless, |
 Thoughts against thoughts ín groans grínd. (13-14)

“The Windhover”に見られたように、ブライト・ソネツツの特徴として、事物の本質と他の要素がインスケイプにより結びつくことで詩語が多義的になる。対照的に、ダーク・ソネツツにインスケイプはなく、自己は個性原理 (haecceitas) を表す。他者と本質を共有するインスケイプと違い、個性原理は自己の独自性を指し、他者と相入れないことを意味する (Cotter 126)。

詩人は「大地の斑は消滅する」と述べているが、“Spelt from Sibyl’s Leaves”の内容は、自己がインスケイプから切り離され、斑のものたちと調和しないことを意味している。しかし、形式的には、隠喩的な複合語にインスケイプを表そうとする試みが見られる。夜は、“womb-of-all, home-of-all, hearse-of-all”という複合形容詞により、その性質が示されている。“hornlight”は「角」と「光」という異なる性質の事物を統合する例の一つである。このように、ホブキンズは技巧により自然界の事物のインスケイプを表そうとしている。

インスケイプを技巧により表すことで対立を統合する試みに反して、内容面において、ダーク・ソネツツは対立の統合とは逆の方向へ向かおうとする。ブライト・ソネツツとの違いは、ダーク・ソネツツにおいては内容と形式が一致していないという点である。結論として、ダーク・ソネツツでは、すべての個物を融合する神の御業の象徴としての斑から隔離された、自己の苦しみが表明されている。

3. ダーク・ソネツツ以降

1888年の“*That Nature is a Heraclitean Fire and of the comfort of the Resurrection*”には、人間とキリストの統合が見られる。“*Spelt from Sibyl’s Leaves*”と同様に、このソネツツにおいても流動的・二項対立的世界が描写されている。冒頭では、メタファーによる雲の動きの描写が、表現に生氣を与え、インスケイプを示している。

CLOUD-PUFFBALL, torn tufts, tossed pillows | flaunt forth, then
 chevy on an air-
 built throughfare: heaven-roysterers, in gay-gangs | they
 throng; they glitter in marches. (1-2)

対立の統合が4行目に示される。「細い線となった光と帆綱のような影が長い鞭ひもとなり、むち打ち、突き刺し、陰と光が混ざり合う。」(Shivelights and shadowtackle in long | lashes lace, lance, and pair.) この変形ソネットでは、ギリシャ哲学者ヘラクレイトスの思想が四大元素である風・地・水・火の描写に見られる。

Delightfully the bright wind boisterous | ropes, wrestles, beats earth bare
 Of yestertempest's creases; | in pool and rutpeel parches
 Squandering ooze to squeezed | dough, crust, dust; stanches, starches
 Squandroned masks and manmarks | treadmire toil there
 Footfretted in it. Million-fuelèd, | nature's bonfire burns on. (5-9)

強風は大気と大地を融合し、水は風を攻撃する。「人間の足跡」(manmarks)は風にかき消され、塵となるが、これは旧約聖書創世記の記述「あなたは、塵だから、塵に帰る」(3章19節)を想起させる。9行目に、突如として、火のイメージャリーが現れる。ヘラクレイトスの考えによると、火は万物流転において最も重要な要素であり、万物は火から生まれ火に帰るとされる。「篝火」は豊穡だけでなく、このソネットの主題である死と復活も象徴している。「人間の足跡」が塵に帰るように、人間の自己としての火も消滅する。

But quench her bonniest, dearest | to her, her clearest-selvèd spark
 Man, how fast his firedint, | his mark on mind, is gone!
 Both are in unhathomable, all is in an enormous dark
 Drowned. O pity and indig|nation! Manshape, that shone
 Sheer off, disseveral, a star, | death blots black out; nor mark
 Is any of him at all so stark
 But vastness blurs and time | beats level. Enough! The Resurrection,
 A heart's-clarion! Away grief's gasping, | joyless days, dejection.
 Across my foundering deck shone
 A beacon, an eternal beam. | Flesh fade, and mortal trash
 Fall to the residuary worm; | world's wildfire, leave but ash: (10-20)

ダーク・ソネットに見られたように、暗闇における時間と空間の無限の感覚がここにも示される。それは、神の御業から切り離された人間の自我の死を意味している。篝火に示唆されたよ

うに、死の直後に復活が続く。「いやもうよそう！あの復活が、心のクラリオンの響きがある！」(16, 17行目) この叫びは詩人と同時に読者をも覚醒する。ダーク・ソネッツとは異なり、詩人は絶望を振り払う。「去れ 悲しみの喘ぎよ、楽しみのない日々よ、失意よ。」(17行目) 暗闇の中に「一条ののろし、永遠の光」(19行目) が閃く。これは詩人が感受する靈感の閃きを表している。たとえ「肉体が朽ち、死すべき体が蛆虫どもの餌食となっても」(19-20行目)、詩人の魂は永遠にキリストと一体になる。

In a flash, at a trumpet crash,
I am all at once what Christ is, | since he was what I am, and
This Jack, joke, poor potsherd, | patch, matchwood, immortal diamond,
Is immortal diamond. (21-24)

“A heart’s-clarion!” という“複合語により、心はクラリオンと結びつき、詩人が靈感を受ける瞬間、彼は魂において「閃光とともにラッパが鳴り響く」のを聞く。キリストとの合一により、詩人の詩的・宗教的情熱が統合される。詩人の自己は「凡夫、笑い種」(Jack, joke) と描写されている。「くだらぬ陶片、布きれ」(potsherd, patch) は、それ自体ではつまらぬものだが、継ぎ合わされることで全体となることから、斑を想起させる。「マッチの軸木」は閃光と対比される人間の自我であり、自我はキリストと合一することにより「不滅のダイヤモンド」となるのである。

ホプキンズのソネットにおける理想はキリストとの合一であり、それにより詩人としての自己と司祭としての自己を統合することができる。彼は考えたのではないだろうか。“That Nature is a Heraclitean Fire and of the comfort of the Resurrection” には、このソネットの詩語が不滅となることへの希求、そして、ブライツ・ソネッツにおける神への賛美とダーク・ソネッツにおける自我の模索の統合が見られる。形式においては通常のソネットを逸脱しているが、メタファーにおける多様性をかろうじて統合しようとする、多義性と不確定性にこそ、ホプキンズのソネットの醍醐味があると言えるだろう。

注

- 1) W. A. M. Peters は、これを「論理的言語」を述る「感情的言語」と呼び、単なる情報である「論理的言語」の高度な形態であるとしている。「作家は冷静であるほど、固着の統語的・文法的規則に表現を適応することにおいて自分の経験を提示することに関わる。しかし、靈感を得た詩人の場合、論理的言語を使用するところでさえ、表現されるべき経験に対する感情的な態度とまさに融合するところまで、そのシステムに表現を適応させるのである。」(Peters 78)
- 2) 「インスケイプ」はホプキンズの造語で、彼のメタファーに顕著である。詩人が対象の凝視と靈感によって見ることでできる事物のもう一つの姿であり、ホプキンズにとって、インスケイプは異なる事物を結び付ける手段となる。これにより、彼は神をその詩語で表そうとした。

参考文献

- Cotter, James Finn. *Inscape*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- Gardner, W. H. *Gerard Manley Hopkins: A Study of Poetic Idiosyncrasy in Relation to Poetic Tradition*. Vol. 1. London: Oxford University Press, 1985.
- Hopkins, Gerard Manley. *The Poems of Gerard Manley Hopkins*. 4th ed. W. H. Gardner and N. H. MacKenzie. London: Oxford UP, 1970.
- Miller, J. Hillis. *The Linguistic Moment*. Princeton: Princeton UP, 1985.
- Peters, W. A. M. *Gerard Manley Hopkins*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell, 1970.
- Roberts, Gerald. Ed. *Gerard Manley Hopkins: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1987.
- 緒方登摩 『ホプキンスの悲しみ』 山口書店 1988年
- _____. *The Sonnets of G. M. Hopkins*. 研究社 1993年

(原稿受理日 2012年9月10日)